

# 「保育内容表現 音楽」授業における学生の学習過程

## —音楽と動きをテーマとした授業アンケート及び感想から—

鈴木 百合香

### 1. 目的

平成 20 年改訂『幼稚園教育要領』の表現領域では、新たに次の一文が加わった。「遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」。これについて『幼稚園教育要領解説』（文部科学省 2008, 173）では、「お互いの活動を見たり聞いたりして相手の表現を感じ取れるように、場や物の配置に配慮する」「教師も一緒にやってみたりして、相互に響き合う環境を工夫する」と記されている。また、「教師の役割」については、「遊びの援助者としての役割が重要」「憧れを形成するモデルとしての役割が大切」と記されており、保育者は、環境を整えること、幼児の表現を受け止めることに加え、教師も一緒にやってみることが大切であるということが強調されている。保育者養成における表現の授業では、保育者として必要となる表現とはどのようなものなのかということについて学ぶことが重要となる。池谷（2004）は、「表現」の継続的な授業研究において、学生が教えられることから学ぶだけでなく、体験に基づいた考え方の習得を重視し、それをもとに伝える力をつけていくために、「まず、学生自身が自分の可能性、特技、好みに気づくことが重要」と述べた。また、和田（2007）は、幼児音楽表現の授業でのワークショップ体験と、『窓ぎわのトットちゃん』（1981）を読んだレポートの内容から、「気づき」について「自己と他者の感性への気づき」「子どもの理解」「個性の尊重」「子どもの感性に基づき柔軟に工夫して音楽遊びの方法を考えていく必要があること」と捉えた。本研究では、学生の、音楽に対する意識調査の結果から課題とされることと、演習授業を通して、子どもと一緒に音楽表現を楽しむために、どのようなことが必要となるかを気づいていく、学習の過程について明らかにすることを目的とする。

### 2. 方法

- (1)「表現」の授業のはじめに、学生に対して「音楽学習経験」についてアンケートを行う。
- (2)授業の各テーマ終了後に、①感想、②実習や実際の保育現場で考えられる活動についてのレポート提出から、学生の学習内容に対する気づき、学習過程を読みとる。
- (3)対象 幼稚園教諭保育士養成学科一年生男子 27 名、女子 66 名計 93 名。

後期授業「保育内容表現音楽」全 15 回のうち、第 1 回目から第 3 回目と第 6 回目。

#### (4) 考察の視点

##### ① 「気づき」について

池谷 (2004) は、「表現」の継続的な授業研究において、保育者としての学生の「気づき」に着目し、感想から、「人間関係(他者との関わり)」「自分(声、からだ、感覚器官)」「素材(楽器、素材、音)」「表現」「保育を行うこと」の 5 つに分けられた。そして、「他者との関わりから自分について知り、互いに学ぶ」「自分自身の身体に気づくことで、経験が具体化する」「素材についての関心を広げる」「視点を変えることで、新しい認識が生まれる」「今後の保育の展開について考え、保育観を育てる」と述べた。また、和田 (2007) は、幼児音楽表現の授業で学んだことと、『窓ぎわのトットちゃん』(1981) を読んだ感想レポートから、学生の気づきについて考察し、音楽教育のあり方と、保育者が持つべき音楽感覚を覚醒させる具体的な方法について示唆した。本稿では、これらを参考に各授業のテーマを通しての「気づき」を学生のレポートから読み取り、まとめる。

##### ② 「音楽的思考」について

音と動きの活動の指導内容を通して音楽的に思考し、表現することを繰り返し行い、保育者として必要な表現を認識していく。音楽表現の過程で思考し、その思考をより発展させていく流れについて「音楽的思考」という理論があり、数々の定義がされている<sup>1)</sup>。永田 (2004) は「音楽的思考」を「内界にもった抽象的な思いやイメージを、授業過程の展開の中で音楽的諸要素にかかわって発展させる思考の流れ」と定義した。「生徒の内界と外界を結ぶ表現媒体を設定して有機的に活用した学習過程を構成すれば音楽的思考の発展を促すことができる」という仮説のもと、「楽譜への書き込み」「指揮的表現」を表現媒体とし、その動作及び変容過程に音楽的思考の発展を見出した。本稿では、授業の中で扱われている、身体表現の指導内容を、内界と外界を結ぶ表現媒体として設定し、音楽的に思考し学んでいく過程を、学生のレポートにおける「気づき」から考察し、各テーマの身体表現における指導の可能性を検討する。

### 3. 「保育内容表現」の授業概要

#### (1) 授業の目的

1. 子どもの遊び歌・わらべ歌・身体表現・創作を通して、子どもと音楽を楽しむための「音楽表現の引出し」を増やし、基礎的な援助(選曲、提示の方法など)を学ぶ。
2. 幼児のリズミカルなことばや歌、動き、音などによる表現に気づき、支え、さらに豊かにする為に「子どもと音楽でコミュニケーションする保育者」を育成する。

#### (2) 習得目標

1. 保育活動で使う歌遊びと手話歌による表現力を養う。
2. お話・音楽を動きで表現する。

3. 人(こども)に伝わるような表現力を養う。

(3)授業内容に必要な資料、楽譜などをまとめ、収録したテキストを作成し使用した。

(4)授業過程

- |                   |        |
|-------------------|--------|
| 1. 呼名とお返事(わらべうたで) | } 毎回行う |
| 2. 発声             |        |
| 3. 歌唱(手話歌?)       |        |

一回目

4. 弾き歌いの導入についての指導——一回目に説明、二回目から七回目まで発表。
5. 幼稚園教育要領領域「表現」について
6. 幼児の音楽的発達について
7. 遊びとしてのわらべうた

わらべうたが、歌をともなう伝承遊びであり、子ども達自身から自然発生した自発的なものであることを理解し、「子どもたちの内にある音楽的な本来の芽を発芽させ、育てる足がかりにする」(小泉 1986, 192)という考えから、まずはじめにわらべうたを題材とした。

①遊びと音楽について、②音階分析(2音から5音まで、核音)、他民族の音階(アラビアなど)、手遊び、縄跳び遊び、鞠つき遊びを体験、③「ずいずいずっころぼし」に即興で動きをつけてみる(グループ活動)。

二回目：カール・オルフの音楽教育について

①リズムのエコー(人(教師)のリズムを真似て打つ)、②リズムの間答の一例(与えられたリズムの続きを即興で打つ)、③リズムのロンド(音のサンドイッチ)。

三回目：オルフの続き

オルフシュールヴェルク(星野・井口 1998)には、一定の方法が示されてはおらず、活動の考え方、教育理念を示す譜例のみが示されている。そこに示された譜例の通りに行うのではなく、日本の“子どものための音楽”を考えるには、日本の子どもが自然に唱える「わらべうた」の音階について理解し、応用する必要があることを強調した。その上で、ペントニック(5音)を使った即興演奏(木琴に丸カラーシールを貼り、二回目の①～③を行う)。その他、民族音階について。

四回目：コダーイの音楽教育について

五回目：表現(くいしんぼうのゴリラ)、オノマトペ『よるのようちえん』(谷川俊太郎 1998)に音と動きをつける。

六回目：わらべうた(おもちつきのお手合せ)、ダルクローズの音楽教育、拍子(お手合せ、ダンス)、音価(動物、3匹のくま)、速度(バス、遊園地)

七回目～十回目：ジャックと豆の木の音楽劇(グループ活動)、音楽創作劇の準備。

十回目～一四回目：音楽創作劇の準備(グループ活動) 一五回目：音楽創作劇の発表会

#### 4. 結果

##### (1) アンケート(第一回目の授業前に記入)

対象 93 名中、有効回答数 81

##### ① 音楽経験 (複数回答可)

ピアノ 30 吹奏楽 9 軽音楽 3 合唱 3 エレクトーン 2 ギター 2 鼓笛 2 ダンス 2 箏  
1 ボーカル 1 タップダンス 1 リトミック 1 なし 27

##### ② 音楽は好きですか。

はい 73 いいえ 9

##### ③ 音楽は得意ですか。

はい 18 いいえ 55 普通 8 (項目外回答)

##### ④ 音楽を難しいと思ったことはありますか。

はい 76 いいえ 3 どちらでもない 2

##### ⑤ 「難しい」と思ったのはどのような活動ですか。(複数回答可、自由記述)

ピアノ 43 ピアニカ 3 リコーダー 10 その他楽器 21 理論(譜の読みかたなど) 7 歌唱・  
合唱 27 合奏 5 踊り(ダンス) 4

##### ⑥ その他

みんなで合わせる活動、みんなの前でする発表や試験、音痴と言われたこと、授業で上手にできなかった為、劣等感を持った・・・等。

##### (2) レポートより

レポートの内容を以下に抜粋した。学生の「気づき」は、「他者への関わり」「自分の表現」「保育に対する意識」「素材」の 4 点に分けられた。

##### ① 他者への関わり

「わらべうた」

- ・お互い自分の知っているやり方を教え合ったり一緒にやったり楽しく勉強になった。
- ・みんなとわらべうたをやるのは楽しかった。

「オルフ」

- ・即興は、リズム、動きなどが同じだったり違ったりして、これも個性だと感じた。
- ・他の人のリズムを感じたり、どんな音にしようか考えながら手や足を使って音を出して楽しかった。音楽を通して自分で表現し、周りの表現を知ることができた。

「ダルクローズのリトミック」

- ・同じ動きだと面白いと思い、違う動きだったら「そういうのもあるんだ」と思った。

##### ② 自分の表現

「わらべうた」

- ・「ずいずいずっころばし」は長くて難しかった。出席をとった時の返事が難しかった。自分の番になる前にドキドキした。

- ・「いちわのからす」はだんだん声が大きくなって、疲れた。

「オルフ」

- ・自分でリズムを考えたり、足踏みするのは難しかった。
- ・即興は、最初は不安だったが、意外とすんなりできた。独創的な作曲家になれた気分で面白かった。「間違いがない」と言われ、不安が取り除かれた。

「ダルクローズのリトミック」

- ・音に合わせて遊園地をみんなでやるのが楽しかった。
- ・最初はお母さん熊になったりお父さん熊になったりいろいろな動物になって体を使って表現するのは恥ずかしかったけど、慣れてくると楽しかった。
- ・はじめは難しく感じたが、思い切ってやってみると体が勝手に動くような感覚で楽しかった。

### ③保育に対する意識

「わらべうた」

- ・今まで伝えられて残ってきたのだから、子ども達に教えて残していきたい。
- ・「ずいずいずっころばし」は当たるまでの間どきどきわくわくするので、そのような思いを子どもたちにもさせてあげたい。
- ・とても楽しかったし、大人になっても覚えているので、一緒に遊びたいと思う。

「オルフ」

- ・先生が考えるのではなく、子ども達に考えてもらい、子ども自身の表現を見たい。
- ・身の周りの色々なもので表現することにより色々な音の違いに気付けると思う。
- ・ひとりひとり自由な音を出し、それらをつなげて曲をつくらせたい。
- ・オルフのシュールヴェルクではなく、童謡、わらべうた、子どもの歌、指導者のオリジナル曲など幅広く取り入れたい。
- ・友達と同じ経験を有することは、子ども達の感性を豊かにし他人の存在を認め、その後の人間関係を築ける。
- ・ありのままを受け入れることで、その子が持っている良さを引き出してあげられる。

「ダルクローズのリトミック」

- ・子どもたちの好きな動物園や水族館などをみんなで音に合わせて体で表現してみたい。
- ・動物などになりきったり、架空の場所にいたり子どもは想像して楽しんで遊べるが、保育者がその世界に入れるような言葉かけや援助が必要だと感じた。
- ・口で説明せずに、違う音やメロディーで思うように動くというのをやってみたい。
- ・保育者が楽しく思いっきりお手本をみせてあげたら子どもも楽しく感じて思いっきり表現してくれると思う。

### ④素材

「わらべうた」

- ・子ども達がつくっただけあって歌いやすく簡単で覚えやすい。

- ・動作が単純だと子どももすぐに覚えて楽しめる。
- ・身近にきく「もういいかい」「まあだだよ」もわらべうたというのを知ってビックリした。他にも言っていないか音階を覚えてきてみたい。
- ・呼びかけの音程をつけると子どももマネしてやってくれると分かった。

「オルフ」

- ・身体を楽器として扱うことは楽しいあそびになる。子ども達にも身近で簡単にできる。
- ・決められた音のみでリズムは自由だったので、間違いや上手い下手が関係なく音・音楽を楽しむことができた。
- ・即興演奏は個性が表れて楽しかった。
- ・音楽の知識がなくても誰もが音楽を楽しめる。

「ダルクローズのリトミック」

- ・音に合わせて、自分で自由に考えた動きをしてもいいと思った。
- ・音楽に合わせた動きや動物の表現をして、音の長さ、速さ等と意識しながら表現した。
- ・現場で色々やってみたいが、そのためにはピアノができないといけないので大変そう。

## 5. 考察

アンケートの結果から、約 70%の学生が、ピアノ未経験者であった。そのためか、入学後、前期の授業で初めて経験したピアノを難しいと感じる学生が約半数であった。学校教育以外の音楽経験は、楽器以外も含めると、約 70%となり、また学生のほとんどは音楽が好きであるが、得意とはいえず、約 90%が難しいと感じたことがあると答えた。また、難しいと思った活動は、ピアノをはじめ、入学以前の学校教育で体験したリコーダー、ギターなどの器楽が多数であり、幼稚園でのピアノも含まれていた。歌唱や合唱も、コンクールに向けた音程や発声の強化や、声量を求められた時と書かれており、技術の習得が必要となる場合が多数を占めていた。その他の記述からは、音楽に対しての劣等感、恐怖感があることがわかった。以上の結果から、「音楽表現に対する抵抗感の克服」と、「自分の表現に自信を持つ」という課題が明らかとなった。それらの克服のためには、授業において体験する音楽表現をどのように受け止め、子どもと一緒に音楽表現を楽しむために必要となることはどのようなことなのかについて、学生自身が感じ、気づき、思考し、そして実践していく必要がある。

学生の「気づき」は、「他者への関わり」「自分の表現」「保育に対する意識」「素材」の4点に分けられた。各項目は次のようにまとめられる。

- ①他者とのかかわりを通して各々の個性に気づき認め合い、さらに自分について知る。
- ②身体表現に対する抵抗感が、音や音楽により活動を楽しむことで緩和される。
- ③自分の体験をもとに、子ども達とともに展開できる活動について考え、そのために必要な表現や言葉かけなどの援助について考えるといった、保育観を育てる。

④「単純」「簡単」「自由」「覚えやすい」といった要素の内容により、子どもと一緒に遊びながら表現を楽しむことができる。

以上、学生による「気づき」は、指導内容を通じた体験から学生自身が表現を行っていく過程の中でのものである。それらの相互関係を、「音楽的思考」の「内界」「外界」「媒介」により考察し、指導内容について検討して以下に述べる。わらべうたについては、「教え合って楽しむ」という遊び方を多くの学生が理解できていた。はじめは難しいと感じていたようであったが、からだを動かして遊ぶうちに夢中になって遊ぶ姿が見られた。オルフの活動についても、「最初は不安だった」「自分で考えるのは難しかった」と、即興表現への抵抗を感じている。しかし「他の人のリズムを感じたり」と、他者の表現を聞き「どんな音にしようか考えながら手や足を使って音を出して楽しかった」「周りの表現を知ることができた」「他の人と違う表現ができた」と自分の表現を工夫している。内界に自分の動きのイメージを持ち、表現し、はじめは「難しいと感じた」「ドキドキした」といった感想を述べていた。「お互いに教え合う」「仲間と一緒に楽しむ」、といった経験(外界)を経て「(歌う)声が大きくなった」という感想を述べている。外界から取り入れられたものが内界に変化をもたらし、表現が作り変えられていき、表現を楽しむに至ったと考えられる。ダルクローズのリトミックでは、「思い切ってやってみると」「思いっきりお手本をみせてあげたら」といった記述から、回を重ねたことで恥ずかしさなど抵抗感が緩和されてきたと考えられる。その過程で、先に述べた相互作用による音楽的思考の発展がされたことと、この回の活動自体の特徴であるが、ピアノで動きを指定するため、ごっこ遊びのイメージがしやすく表現しやすいと感じられたようでもあった。しかし、色々なものになりきって遊びながら音楽的要素を獲得するという目的のもと行われるため、「音に合わせて、自分で自由に考えた動きをしてもいいと思った」「ピアノができないといけないので大変そう」という記述もあり、ピアノにより動きを限定的に誘導するよう感じられたところがあったと考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

内界のイメージにある動き方、表現方法が、教育の方法、理論の理解、実践による「気づき」により、保育者として必要となる、子どもに伝えるための表現となった。学生自身の「気づき」は、内界のイメージに作用し、音楽的思考を発展させた。また行った指導内容を表現の媒体とし、音楽的思考を繰り返すことで表現への抵抗感を緩和し、個々の個性や保育者としての意識を育てる一つの方法となったと考える。本稿で扱った活動以外についてもアンケート調査を行い、内界、外界、媒体の相互関係がより活性化し、音楽的思考の発展が可能となるための指導媒体について検討したい。こうした、表現の結果や成果ではなく、活動の過程を重視するという観点を学生と共有していけるよう、継続した授業研究を行っていくことが課題とされる。

## 文献

- 池谷潤子 2004 「学生の中の『気づき』を育てる」『日本保育学会大会発表論文集』57: 224-25.
- 兼平佳枝 2009 「日本の学校音楽教育における『音楽的思考』の展開過程」『学校音楽研究』北海道教育大学紀要教育科学編 60(1): 47-54.
- 黒柳徹子 1981 『窓ぎわのトットちゃん』講談社 1981.
- 小泉文夫 1986 『子どもの遊びとうた—わらべうたは生きている—』草思社.
- 小島律子 1980 「Manhattanville Music Curriculum Program の教育的意義—音楽的思考への着目—」『教科教育』大阪教育大学紀要第 V 部門 29(2・3): 133-46.
- 1984 「創造的音楽づくりにみられる児童の発達の様相(I): 能勢町立田尻小学校における 1・2 学年の場合」『教科教育』大阪教育大学紀要第 V 部門 33(1): 33-43.
- 1998 『音楽による表現の教育—継承から想像へ—』晃洋書房.
- 谷川俊太郎 文/中辻悦子 絵・写真 1998 『よるのようちえん』福音館書店.
- 永田尚子 2004 「歌唱表現における生徒の音楽的思考の発展を促す学習過程の構成」『学校音楽教育研究』8: 173-82.
- 野波俊子 1998 「音楽活動において子どもは何にたいしてイメージをもつのか」『学校音楽研究』2: 54-56.
- 星野圭朗・井口太 1998 『子どものための音楽 即興表現 II』日本ショット.
- 松永洋介 2001 「音楽的思考に注目すると授業はどう変わるのか」『学校音楽教育研究』5: 156.
- 和田幸子 2007 「保育者養成校における演習『幼児音楽表現』と学生の学習プロセス: ワークショップと『窓ぎわのトットちゃん』のレポートより」『生活科学研究誌』6: 139-50.

---

## 注

<sup>1</sup>①小島 (1984) は、音楽づくりの実践における子どもの音楽的思考について、「楽器に限らず広い範囲に音源を求め、音や音組織の仕方を取捨選択するための試行錯誤的な実験を通してその子なりのまとまりをもった作品をつくりあげていく活動である」と述べている。②野波 (1998) は、「音楽の要素によって広がる感情に、自己の過去の美的価値感情を類似、対比、変化させながら分析・統合を含む創造的思考とする」と述べている。③松永 (2001) は、「イメージの質的变化に伴って、子どものこだわる音楽の諸要素も変わり、豊かな表現になっていく。授業における導入の場や交流の場が、音楽的思考を促進し、発展させていくために大切なものである」と述べている。④兼平 (2009) は、「表現の原理」(小島 1998)を基に、「『外界』『内界』『表現の世界』の3つの世界の相互作用である」とし、「音素材や音楽の構成要素に対して働きかける活動と、その結果として音素材や音楽の構成要素から受けるものとの間の連続的な関係を見出す働き」であるとした。

<sup>2</sup>手話歌は、言語としての手話というよりは、音楽を手や体の動き、表情によって表現し、伝えることを目的に行った。